

ムカシの競馬を読む

平成18年・京都競馬場
エリザベス女王杯
優勝馬:フサイチパンドラ

© JRA



第134回 10年・20年・30年前の11月

いまから10年前、平成18年の11月というと、G1レースでは歴史に残る降着劇があった月だ。平成18年11月13日付の『デイリースポーツ』から引用しよう。

「まさかの結果だった。12日、京都競馬場で行われたエリザベス女王杯・G1は、無傷の6連勝でカワリカミプリンセスが頂点に立ったと思われた。だが、最後の直線で内側に斜行、他馬の走行を妨害したため、12着に降着となつた」

G1での1位入線馬の降着は天皇賞秋のメジロマツクイーン以来。カワリカミプリンセスは桜花賞に出走していないが、ここで「変則三冠」が期待されていたが、それは成らなかつた。

このときの被害馬を10年経つたいますぐに言える人はほとんどいないうだろ。正解は繰り上がり11着のヤマニンシュウル。着差では1位入線馬と1秒4差だから、いまのルールなら楽々セーフとなる。馬の実



ムカシの競馬を読む



須田鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレーダー、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

力は間違いないだけに、もつたない下降着だった。

さて、この11月は海外関係でめでたいことがいくつか起きている。まずは21日付の『スポーツ』から。

JRAは20日来年度から国際セリ名簿基準(ICS)ブックにおいて、日本が世界で16番目のパートI国へと昇格することが決まったと発表した。これまで日本は世界トツクラスの競走レベル、賞金の競馬を施行してきたが、外国馬出走に対して制限があるなどの理由でパートII国に置かれていた。この決定で競馬一流国として世界に認められたことになる

パートIというのはそれがすなわち「優れた競馬」というわけではなく、例えば日本より先にブラジル、アルゼンチン、ペルーといった国が獲得している。日本の場合は馬産レベルの問題以上に「なまじ賞金が高い」ということが開放へ向けたネックになっていた(外国調教馬)

が大挙来襲したら困るので、日本調教馬のレベルアップがより広範囲な開放を可能にし、それがパートI取得につながった。

実際、既にこの時点で「マル外ブーム」は既に峠を越えていたし、力外については「ジャパンカップ」でさえ「来年は開催されない」ということのほうが問題になるほど。それだけ日本の競馬や馬産は力をつけてきたといえなくなる。11月8日付の『読売新聞』から。

「豪州競馬のメルボルンカップが7日、メルボルンのフレミニントン競馬場で行われ、昨年の菊花賞馬デルタブルース(牡5、岩田康誠騎乗)が1着となった。2着には頭差の半分の差(筆者注:向こうの着差表記でいうショートヘッド)でボック(牡5歳、ダミアン・オリバーライド)が入った。両馬はともに栗東・角居勝彦厩舎の管理馬」

この当時はディープインパクトの凱旋門賞に大量のファンと報道陣が押しかけた一方で、メルボルンカップのほうはほとんど注目されていなかった。私はメルボルンのほうに行っていたのだが、來いた日本人プレスは10人もいなかつたように思ふ。

いずれにしても、世界的知名度を誇るビッグレースで日本調教馬、それも内国産馬がワンツーを決めたことは、直後にパートI昇格を行なったものだうと言えよう。

続いていまから20年前、平成8年11月から。この月はダンスインザダークの屈腱炎発覚→引退など、あまり良くないニュースの多い月だった。ちゃんと検証したわけではないが、この時期がいちばん、スタッフは行っていたのが、良くなかった。プレスは10人もいなかつた。決めた日本にとって、良いアピールになるものだうと言えよう。

ということで、競馬の本流に関わる出来事ではなく、この連載でちょっと見られる。

のコースが新設されることになつており、11月中のスポーツ紙などはそれを話題にしていた。

最初に使用されたのは11月29日の2R2歳未勝利戦(当時の表記では3歳)で、ジョウホールという抽選馬が優勝。鞍上は、現在調教師の天間昭一騎手だった。

ところがこのコース、年に数回しか利用されることがなく、平成4年12月5日の未勝利戦を最後に使われなくなつた。施行回数は全部で18回。大規模改修が絡まない4大場のコースで、ここまで「使われなかつたコース」というのは無いのではと思う。

JRAのホームページを見るとコース設定としてはまだ残つているようなのだが、障害コースを横切る形が不評でもあつたようで、復活の可能性はないだろう。スタート地点は小さなショートになつておらず、終端は馬溜まりとして利用されている。

最後に同じ月からもうひとつ。11月20日付の『日刊スポーツ』から引用しよう。

「7冠馬シンボリルドルフの種牡馬価値は10億円! 19日、東京都千代田区紀尾井町のホテル『ヨーロッパ』で、世界でははじめての種牡馬権利の公開入札が行われた。売り出されたのは50株のうちの13

株。27人の入札希望者が思い思いの値をつけたが、13番目の入札価格2000万円で上位13人が一律に落札した

シンボリルドルフはもともといまでいう競走馬ファン300口になつており、6口持つていればそのまま1株になつたとのこと。5口以下のぶんをまとめたら13株になつたようだ。それが入札にかかつたとのことだ。

目新しいのは公開入札にしてマスコミも招いたことで、競馬に世間の耳目が集まり、ニュースヴァリューを得つづつあった時代らしい試みである。この企画の提案者だった白井透氏が開票役を務めたと記事にはある。

面白いのは、当時のメディアといふのは遠慮がないといふか、入札結果がすべて記事になつていて、この企画の提案者だった白井透氏が開票役を務めたと記事にはある。

されたのは山崎牧場で、最初に種付けして生まれた仔がオープン特別勝ちや朝日杯4着などで1億円以上稼いだヤクモアサカゼだった。ちなみに2000万円で札を入れたのは山崎牧場で、最初に種付けして生まれた仔がオープン特別勝ちしなかつた入札者まで記事中では触れられている。